

戦後 80 年・徳島県日中友好協会平和友好訪中団報告

本年は、戦後 80 年であると同時に昭和 100 年でもある。日本は、明治・大正・昭和と欧米列強に対抗できる近代国家を築くため「富国強兵」というスローガンの下、経済の発展と軍事力の強化、そして中国・朝鮮半島をはじめアジア諸国への侵略を進めてきた。

徳島県日中友好協会は、2025 年 10 月 26 日から 31 日まで「平和友好団」を大連・丹東・通遼・瀋陽に派遣した。丹東市では、徳島市・丹東市友好交流 35 周年事業調印式に参加、「朝鮮戦争資料館」「鴨緑江断橋」を見学した。瀋陽にある「9・18 歴史博物館」は、満州事変(1931 年 9 月 18 日)の発端となった柳条湖事件の現場近くに建設されている。関東軍が南満州鉄道(満鉄)を爆破、「中国軍・張学良らの犯行」を口実に中国軍を攻撃し、満州全域を占領した謀略事件の現場でもある。展示内容が「反日」一色かと思いきや「日中戦争」の歴史を史実に基づき忠実に展示されていた。未来志向の平和学習として正しい歴史を学ぶこと、古典『史記』の「前事不忘、後事之師」になぞらえ、過去の経験や教訓を忘れず将来の行動の手本として学ぶ博物館である。10 月 29 日、通遼にて、中国残留孤児である烏雲先生(日本名 立花珠美さん)へ徳島県知事からの感謝状(徳島県民との日中友好に貢献)と記念品(遊山箱)を届けるため訪問した。烏雲先生には、病気療養中のため面会できず、お孫さんの「馬森さん」に感謝状と記念品を手渡した。帰国して一週間後の 11 月 7 日、烏雲先生の訃報に接し、何とも言えない悲しみに包まれた。心からのご冥福をお祈りしたい。

烏雲先生は、1945 年 8 月 14 日、内モンゴルの葛根廟近くで旧ソ連軍の襲撃に遭い、家族 5 人を亡くし孤児となった。満 7 歳、小学 1 年であった。戦争に翻弄された人生の中で教育者として地元(庫倫旗)の子どもたちに慕われ、沙漠植林に情熱を注ぎ、常に平和の大切さを説いてきた。馬英春さん(長男)によると烏雲先生の遺骨は、遺言で大連沖の黄海に散骨された。二つの祖国をつなぐ「一衣帶水」の海を行き来できるとの思いを込めて、いつまでも平和な世界であり続けることを戦争孤児として伝えたかったに違いない。

「平和友好団」は、10 月 30 日、遼寧省人民対外友好協会と懇談会を開催した。賣桂芬副会長は、遼寧省と徳島県の交流を振り返り、とりわけ 1991 年に丹東市と徳島市が友好都市として締結以来、経済、貿易、文化、教育の分野で実用的な協力をやってきたと述べた。今年 8 月には、北京で開催された中日友好交流都市卓球大会にも共同でチームを編成し熱戦を繰り広げた。過日、遠藤彰良徳島市長が代表団を率いて丹東市を訪問し、友好都市締結 35 周年を祝す事業調印式が行われ、両市の友好関係がさらに深まるとした。さらに、歴史を記憶し、平和を大切にすることが中日関係の健全かつ安定した発展を促進するための基本的な前提であると強調、徳島県日中友好協会と協力し友好の伝統を継承、協力の分野を拡大する用意があると強調した。

葭森健介会長は、快く懇談会に応じていただいたことに感謝の意を表明し、自身の遼寧との深い関係について語り、戦後母の帰国に際して無私無欲に助けていただいたことに触れ、遼寧省の人々に深い感謝の気持ちを抱くようになったと述べた。徳島県日中友好協会

の活動を紹介、青年交流等の活動を通じて、日中友好の火をつなぎ若い世代が、歴史を正しく記憶し、平和を大切にできる事を期待していると述べた。藤原学副会長からは、丹東市と徳島市の友好交流設立の歴史を振り返り、両市のような分野における交流成果について報告し、今後の実務協力の更なる進化への期待を表明した。

今後双方は、グリーン産業、現代農業、医療、経済貿易分野での取り組みの強化、学校や青少年団体の相互訪問、文化体験、スポーツ交流の実施を奨励し、丹東市と徳島市の友好関係を支援し、遼寧省のより多くの都市と徳島県各地の友好交流チャネルの確立を促進することで合意した。

「平和友好団」は、10月31日、戦後80年の節目として、平和で豊かな日中交流の成果を土産に瀋陽空港から帰国の途に着いた。

2025年12月1日

藤原 学（徳島県日本中国友好協会 副会長）